大阪府　令和3年度 英語教育改善プラン推進事業

取組：大阪の子どもたちの英語4技能(「聞く」「読む」「話す」「書く」)を総合的に向上させる

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

教員の英語使用や、生徒の言語活動の量的増加に対して、授業の質的充実が不十分である
⇒ 課題① 教員の英語力向上(リーダー教員の資質向上)
⇒ 課題② 生徒の英語力の的確な見取りと適切な指導

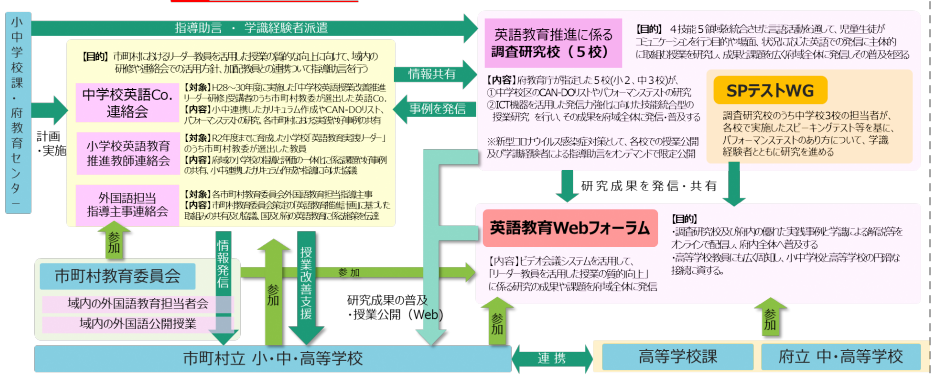
令和元年度英語教育実施状況調査より（政令市除く）

	H30	R1	R2	R3目標
求められる英語力(CEFR　A1以上)を有する生徒の全生徒に占める割合（中３）	45.3%	46.9%		50%
授業における、英語担当教員の英語使用状況（50%程度以上）	95.4%	97.3%		100%
授業における、生徒の英語による言語活動時間の占める割合（50%程度以上）	84.4%	89.1%		100%

Plan・Do

育成　新学習指導要領の全面実施(中学校)「目的や場面、状況に応じた"やりとり"を行う力の育成」
普及　府内の小中学校の好事例の普及
伝達　リーダー教員のミッションと役割

目　標　● 令和３年度英語教育実施状況調査(国調査)　生徒英語力　50%
(CEFR A１以上)



Check

■課題①：教員の英語力については、国の目標値に到達していない。「生徒が英語に触れる機会を充実する」という観点から、英語で授業を行う取組みをさらに推進するためにも、教員の指導力向上だけでなく、英語力向上を図る取組みを推進していく必要がある。
■課題②：中学校における一定の英語力(CEFR A1以上)を有する生徒の割合と、全国学力調査の結果を比較すると、概ね、府全体において一定の英語力の見取りを行うことはできている。一方で、一定の英語力(CEFR　A1以上)を有する生徒を見取る際に、市町村で見取りに差が生じていることが明らかになっている。実際の生徒の英語力について、的確な見取りと適切な指導ができていないことが原因であると考えられる。

Action

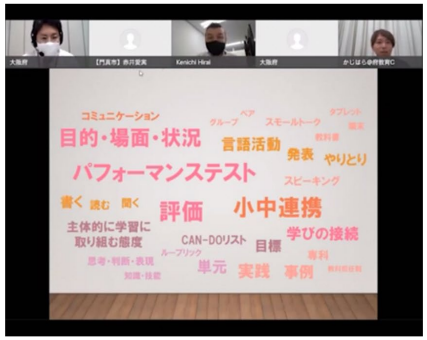
■課題①：資格・検定試験の活用を促すとともに、英語力向上に資する研修を実施するなど、英語教員の英語力向上に向けた取組みを実施する必要があると考えている。
■課題②：全国学力調査における55.0ポイント前後の市町村では、CEFR　A1相当以上の見取りに大きな幅が生じていることが明らかになっている。英語力を向上させるためは、教員が児童生徒の英語力を客観的に見取り、実態に応じて授業を改善することが重要であることから児童生徒の学習到達度を客観的に見取る判断基準を開発することが必要である。また、児童生徒が指標を参考にしながら各自の学習到達度に応じて英語の４技能５領域を学ぶことができるシステムを構築していく必要があると考えている。

成果の普及

①Web会議システム（主にZoom）を積極的に活用
②授業公開をオンデマンド（Youtubeで限定公開）で実施

【成果】
・Webフォーラムや小学校英語推進教師連絡会等に向けて、授業動画を公開し、参加者が事前に視聴しておくことで、当日の協議がより深まった（テロップ等で授業のポイントを伝えやすい）
・集合型研修等の出張が減少し、移動時間が大幅に削減
・新型コロナウイルス感染症の感染状況にも臨機応変に対応可能

英語教育Webフォーラム



各校約500回程度視聴されました
（繰り返し再生できると好評でした）

英語教育推進に係る調査研究校（５校）授業公開（オンデマンド）

今後の展望

Self Training for English Proficiency of Students in Osaka

STEPS in Osakaの開発
（新・大阪版CAN-DOリストをベースとした英語学習ソフト）

＜目的＞児童生徒1人ひとりの学習到達度に応じ、1人1台端末を使用して個別最適な学びを実現するための学習ツールの作成

STEPS開発WG会議
新・大阪版CAN-DOリスト作成 → STEPS in Osaka 問題作成

聞く　読む　話す（やりとり）　話す（発表）　書く
4技能5領域
×
10段階
(CEFR-Jに準拠)

Lv.
Advanced　英検２～準１級　CEFR B1～B2相当　高校
Standard　英検３～準２級　CEFR A1～A2相当　中学校
Basic　英検５～準４級　CEFR-J・Pre A1相当　小学校

【完成イメージ】
●新・大阪版CAN-DOリストのうち、CEFR-JのPre A1からB2までの10段階で習熟・能力ごとに問題を作成
●個別に配備された1人1台端末上でインターネット接続して利用（Webシステム）

文部科学省が運用するMEXCBT（メクビット）に府作成の問題を搭載

【WG会議メンバー】
・小学校英語リーダー経験者
・中学校英語Co.
・高等学校教員
・市町村教委英語担当指導主事

・CAN-DOリスト作成
・各段階の問題作成
・所属校での実践
（授業改善・学習評価に活用）

【システム開発業者】
・CBT問題例の提示
・Webシステムへの搭載

【学識】諮義・指導助言

研究成果を連絡会等で発信
連絡会等での意見・提案を反映

【府教育庁】小中学校と高等学校間における英語の学びの共有・府域全体への取組みの普及
英語教育Webフォーラム（小中・高共通（年4回））
中学校英語Co.連絡会（小中）
外国語担当指導主事連絡会（小中）
大阪府教育課程協議会（高）
小・中・高それぞれの研修の成果・教材・実践事例、授業公開等の情報を共有し発信する

連携・協力　大阪府中学校英語教育研究会

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～吹田市立南千里中学校～

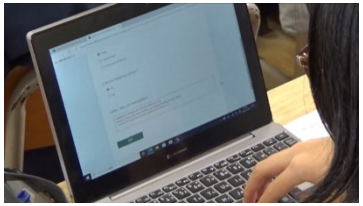
テーマ　話すこと(やりとり)における即興性の向上

課題

【課題】 関心のある事柄に対して、定型的な質問しかできない生徒が多い。
【要因】 やりとりの活動練習が不足していること。また、既習事項が質問にどう関連するかという気づきを与えられていない。

具体的な取組と工夫

■帯活動を通じて、4技能5領域をバランスよく扱う。
■教員研修で、生徒に既習事項の表現がどのように会話に関連付けられるかという気づきを与える方法について協議する。
■年間2回の公開研究授業を実施（7月、11月）
■スピーキングテストを年5回実施し、即興的なやりとりの資質・能力の向上を図った。



←第2回公開研究授業（11月）の様子
1人1台端末を活用し、TeamsのFormsアプリで自分の意見を記入し、全体で共有していた。

〇第１回公開研究授業（７月） 題材：New Horizon English Course３ Unit３ Animals on the Red List
研究テーマ「伝える力を基盤とした言語力の育成～言語活動6項目の充実～」
主たるテーマとして、「1．感じたことを表現しよう！」と「6．伝えあって、考えを深めよう！」を意識した授業づくりについて協議した。
参加者：当該中学校全教員、府教育センター指導主事、市教委指導主事

〇第２回公開研究授業（１１月） 題材：NEW HORISON English Course 3 Unit4「Be Prepared and Work Together」
研究テーマ「ICTを活用して自分の考えを表現する（ライティング）」
生徒会選挙で3名の候補者の公約を読んで、自分が投票したい人について、根拠をもって理由を伝えることができるようにするという授業をし、事後に市内英語科教員で協議した。
（関西大学　竹内理教授による指導助言）
参加者：当該市中学校英語科教員（18名）、府教育センター指導主事、市教委指導主事

◎担当教員が英語コーディネーターであり、当該市の英語科教員の中心となり、調査研究校の取組みを市域に発信していた。また、校内研修では、英語科以外の教員も当日の研究授業について協議し、「教科の壁」を越えた授業づくりについて組織全体で考えていた。

成果

項目	対象学年	第1回 (7)月	第2回 (11)月	年度末 (　1　)月
即興的なやりとりの問題における正答率※	3年	76%	68%	82%

※　平成31(令和元年度)度 全国学力・学習状況調査の「話すこと」2をモデルに、調査研究において作成して実施

■一年間を通じてALTとのやりとりで、生徒自身から質問をするなどして、自然な会話が成立している場面が非常に増えた。話題の深堀や転換などもスムーズに行える生徒が増えた。

課題及び改善案

■英語に対する苦手意識が強い子や、未習の単語などに対してうまく切り返せない生徒は依然として一定数おり、そうした生徒に対する手立てを英語科教員で今まで以上に共有する必要がある。

（改善策）「2回同じことを言う」、「言い直す」、「パターンを作る」ということを教員が意識して、理解を促すとともに、ペアやグループワークを通して、友だち同士で助け合わせることも大切にしていく。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～枚方市立菅原東小学校～

テーマ　自分の考えや思いを伝え合う喜びを感じる子どもの育成～理解し合い、共感し合い、つながり合う～

課題

【課題】「英語で話したり聞いたりすることは楽しいですか。」という質問に対して、約7割の児童が肯定的な回答をしていることに対して、伝えることについて3割の児童が消極的である。

【要因】 消極的な回答をした児童のうち約6割の児童が、「単語や表現がわからない。」と回答しており、次いで、「友だちと話すのが得意ではない。」「間違えるのが恥ずかしい。」という回答が続いた。単語や表現の定着が不十分であること、間違いを恐れていることが要因と思われる。

具体的な取組と工夫

上記の課題を改善するため、「つながり合う。」をポイントに、次の取組みを進めた。

①「間違っても伝えよう」という話し手の育成と「伝えようとしていることを聞こう」とする聞き手の育成。

②スモールトークと中間指導（中間振り返り）をベースに、活動の目的、授業の進め方、ポイントを学校全体で共有し、外国語の取組を他教科にもつなげる。

③単元の逆向き設計、話し合い・交流の仕方　各学年の系統性等について校内全体で進める。

↑第１回公開研究授業（７月）の様子
Youtube上で府内の教員に公開した

〇第１回公開研究授業（７月・４年生）　題材：　Let's Try2 Unit4『What time is it?』
目標「友だちのことをよく知ったり,自分のことをさらに知ってもらったりするために好きな時間を伝え合う」
研究協議・指導助言　東京家政大学　太田　洋教授
参加者：当該小学校全教員、府教育庁指導主事、市教委指導主事

〇第２回公開研究授業（１１月・６年生）　題材：　Here We Go!6 Unit7『My Best Memory』
目標「自分の考えや気持ちを伝えるために、小学校生活のいちばんの思い出について、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合う」
研究協議・指導助言　東京家政大学　太田　洋教授
参加者：当該小学校全教員、府教育庁指導主事、市教委指導主事

◎全教員が1人1台端末でロイロノートを使って研究協議をするなどの工夫が見られた。

成果

項目	対象学年	参考値現状値	第1回 (5)月	第2回 (10)月	年度末 (2)月
英語の授業では、英語で自分自身の考えや気持ちを伝え合うことができていた。	6	80%	82.9%	86.5%	86.3%
英語で話したり聞いたりするのは楽しいですか。	3～6	70%	80.2%	77.8%	83.3%

■アンケート項目で上記の「伝え合う」回答では、86%に上昇した。また、「英語の授業で、友だちのことを新たに知ったり、深く知ることができた」の問いに対して、88%の肯定的回答を得られ、英語をコミュニケーションの手段の一つとして、自分の考えや思いを伝え合う児童が増え、友だちと関わり合い、「つながること」に結びついていることがわかる。

課題及び改善案

■伝え合うことができた、つながることができた児童は増えたが、そこに喜びを感じたり、英語で話したり聞いたりすることが楽しいと感じる児童は、80%程度にとどまった。消極的な回答をした児童は、「単語や表現がわからない。」「間違えるのがはずかしい。」という理由を挙げていた。

（改善策）デジタル教科書が導入され、自分で不安な単語や表現が確認できるので、発音がわからない等の不安を解消するとともに、知識・技能の定着を図り、自信へとつなげていきたい。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～東大阪市立義務教育学校くすは縄手南校（後期課程）～

テーマ　目的・場面・状況に応じて考えを伝え合う言語活動及びパフォーマンス課題の追求と授業における実践

課題

【課題】 与えられたテーマに対して即興で話したり、質問に答える力
【要因】 授業における言語活動の場面設定が実際のコミュニケーションの場面になっていない。また、発信語彙の量が不十分で、自分の気持ちを即興的に伝えることができないのではないかと考えられる。

具体的な取組と工夫

■帯活動に表現活動を取り入れる。（チャット、ミニディベート等）
■単元の指導計画に基づき、単元ごとにパフォーマンステストを実施する。
■年間のパフォーマンステストを計画、実行し授業改善、テスト改善につなげる。

←第1回公開研究授業（7月）の様子
あらかじめ設定されていた目的・場面・状況から、突然、プランの変更を余儀なくされる“しかけ”により、生徒たちに即興的にやりとりをする必要性を意図的に生じさせていた。

〇第１回公開研究授業（７月） 題材：NEW CROWN 3　Take Action Talk 2「ALTの先生のために長崎観光のプランを作ろう」
目標：長崎観光の行先について、自分の意見や相手の意見について理由や情報を整理し簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりできる
研究協議・指導助言：関西大学　竹内　理　教授
「指導と評価の一体化をめざして　新学習指導要領下での英語授業」
参加者：当該校全教員、当該市中学校英語科教員、府教育庁・教育センター指導主事、市教委指導主事

〇第２回公開研究授業（１１月）
題材：New Crown English Series3 Lesson5　Project2　「Nawanan　New Idea Competitionに応募しよう」
目標：学校をよりよくするアイデア（イベント、ルール、クラブ、授業）を考え、伝え合う
研究協議・指導助言：関西大学　竹内　理　教授
「言語活動を通して、英語での発話に主体的に取り組む授業の実践」～目的・場面・状況に応じた“やりとり”を行う力の育成をめざして～
参加者：当該校前期・後期課程教員、当該市中学校英語科教員、府教育庁・教育センター指導主事、市教委指導主事

◎義務教育学校ということもあり、前期課程の外国語担当教員と、研究校の担当者が密に連携し、小中の学びの接続について着実に実践を積み重ねていた。また、目的・場面・状況を意識した授業づくりについてのアイデアや工夫が市域だけでなく、府域におけるモデルとなっていた。

成果

項目	対象学年	参考値 現状値	第1回 7月	第2回 12 月	年度末 1 月
普段の英語のやりとりで、自分の考えや思いを相手に伝えることができていますか	9	63%	73%	85%	90%

■パフォーマンステストの年間計画を立て、目的・場面・状況を明確にしたパフォーマンステストを実施できた。CAN-DOリストの学習到達目標をもとに、授業の中で言語活動を充実させ、言語活動の中間指導や、形成的評価を心がけたため、自信をもってパフォーマンステストに臨む生徒が増えた。日常的な話題においては、即興でやりとりを一定継続できるようになった。社会的な話題においては、自分の考えたことを、相手に理由とともに伝えることができるようになった。

課題及び改善案

■パフォーマンステストのタスク設定と評価基準の設定が課題である。

（改善策） 生徒の英語力の現状を把握した上で、オーセンティックでチャレンジングなタスクの設定を見極め、タスク達成のための日々の学習指導を緻密に行う必要性がある。また、流暢さと正確さ両方を育成する点で、『話す』活動と『書く』活動を統合した言語活動を効果的に実施していきたい。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～泉大津市立東陽中学校～

テーマ　目的・場面・状況を意識することで、主体的な発信が技能統合に結び付く授業

課題

【課題】 場面や相手の反応などに応じた柔軟な会話を展開することができない。
【要因】 正確性を気にするあまり、自分の思いを主体的に表現する経験が少ないのではないかと考えられる。

具体的な取組と工夫

「話す」「聞く」といった言語活動の必然性を高めるため目的・場面・状況の設定を工夫する。
- ペアトーク活動の充実
- 聞き取ったことを書く活動（技能統合）
- ICT機器の効果的な活用

←第２回公開研究授業（１１月）の様子
1人1台端末を活用し、ロイロノートで内容をまとめ、自分たちが考えた防災バッグの中身について発表していた

〇第１回公開研究授業（７月）　題材：You can do it!（「大阪のおすすめ観光プランを伝えよう」）
目標：既習の言語材料を用いて、具体的な相手意識を持った観光プランを考え、発表することができる
研究協議・指導助言：関西大学　今井　裕之　教授
「目的・場面・状況」の設定方法　活用の工夫について
参加者：当該市中学校英語科教員、府教育庁・教育センター指導主事、市教委指導主事

〇第２回公開研究授業（１１月）　題材：Here We Go!2 Unit5「Earthquake Drill」
目標：既習の言語材料を用いて、海外から来た友人に防災バッグに何を入れるべきかを考え、伝えることができる
研究協議・指導助言：関西大学　今井　裕之　教授
公開授業で取り入れられた「目的・場面・状況」の設定など工夫について
参加者：当該市中学校英語科教員、府教育庁・教育センター指導主事、市教委指導主事

◎担当教員の英語コーディネーターと授業改善の推進担当の加配教員が協力し、調査研究校の取組みを市域に発信していた。また、生徒が１人１台端末でロイロノートを使いこなし話すこと（発表）の際に積極的に活用している場面が見られた。他教科でも使いこなしていることが窺えた。

成果

項目	対象学年	参考値 現状値	第1回 7月	第2回 12月	年度末 1月
英語の授業で学習して、将来、社会に出たときに役に立つ力がついたと思いますか？	2	R1全国学調 85.4%	56%	88%	93%

■言語活動の目的・場面・状況の設定を工夫することで、相手のことを考え、相手に応じた表現の適切さを考える機会へとつながり、思考力・判断力・表現力の育成が推進された。また、実際に相手に伝える重要性や達成感を得ることで、生徒の学習意欲が高まった。研究授業と協議では、言語活動の実践基盤となる、学習規律や場の設定の工夫に関する助言をいただいたことにより、日々の学習環境の改善にもつながった。

課題及び改善案

■思考力・判断力・表現力(表現の適切さ)と比較すると、知識・技能（正確さ）の向上においては課題がある。知識・技能の育成にもつながるような言語活動の質的向上が必要である。

（改善策）指導と評価の一体化の観点から、スピーキングテストのみならず定期テスト等による評価の在り方も改善サイクルにおいてさらに重視していく必要がある。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～貝塚市立二色小学校～

テーマ　英語を使いたい、英語が好き、楽しいと子どもたちが思える授業の実践

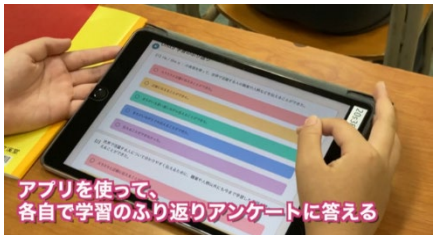
課題

【課題】 児童アンケートで「外国語・外国語活動の授業は楽しい」の肯定的回答は高いが、「外国語活動・外国語の授業で、先生や友だちと英語で会話することは好きだ」が低い。また、「外国語活動・外国語の授業で学習している内容は、将来に役に立つと思う」の肯定的回答は高いが、「普段の生活の中で、授業で学習した外国語を使っている」が低い。

【要因】 他教科の授業や普段の生活の様子から、「正しく答えなければ、正しく発音しなければ」と考えている児童が多いように感じる。また、前述のように感じている児童が多いため、普段の生活で使ってみようという意欲が低いのではと考えられる。

具体的な取組と工夫

〇上記の課題を改善するため、当該校の担当者である英語専科教員が、授業のみならず、普段の生活も基本的に英語で発話することにした。
子どもたちに「この先生は英語の先生だから、普段も英語で話してみよう」と感じさせることをねらいとした。
〇児童の表現について、間違いを指摘するのではなく、リキャストを意識した指導を行った。



↑第１回公開研究授業（10月）の様子
教員が事前にアプリでふり返り用のアンケートを作成していた。授業の逆向き設計の成果でもある。

〇第１回公開研究授業（10月・6年生） 題材： He is famous. She is great.
本時の目標「世界で活躍する人を紹介し、その人のファンを増やすために、ペアで伝え合う」
研究協議・指導助言　関西大学　今井　裕之教授
参加者：当該小学校教員、当該市中学校英語科教員、府教育庁・教育センター指導主事、市教委指導主事

〇第２回公開研究授業（1月・6年生） 題材： What do you want to be?
本時の目標 「未来はがき」で、10年後の自分に将来の夢を伝えよう
指導助言　関西大学　今井　裕之教授（新型コロナウイルス感染症の影響により収録した授業動画に対して動画で助言）

◎ALTと専科教員が密に連携し、授業内外で児童が英語に触れる機会を多く生み出していた。また、校区の中学校英語科教員と連携し、英語科における小中の学びの接続について研究を推進し、市域に発信していた。

成果

項目	対象学年	参考値 現状値	第1回 7月	第2回 12月	年度末 1月
「外国語活動・外国語の授業で、先生や友だちと英語で会話することは好きだ」の強い肯定	3～6年生	46.9%	68.8%	73.6%	71.5%
普段の生活の中で、授業で学習した外国語を使っている	3～6年生	63.1%	71.9%	75.0%	72.8%

■言語活動の充実を図る手立てとして、「RESPONSE」（反応すること）を意識して取り組んできた結果、友だちの話をしっかり聞こうとする主体的な態度が見られるようになってきた。友だちに反応してもらえると嬉しいという体験から、英語での会話が好きと感じる児童が増えたのではないかと考える。今後もこの取り組みを継続していきたい。

課題及び改善案

■年度当初の現状値よりは各項目で上昇しているが、12月と比べて年度末時点の数値が下がっている。学校では、英語専科やNETが児童に英語で話しかけるようにしているが、3学期始まってすぐのアンケートで、児童が十分な会話活動を行えなかったのも要因の一つと考えられる。
（改善策）普段の生活で主体的に英語で話す機会を増やせるような手立てが必要と考える。またコロナ感染防止対策を講じながら言語活動の機会を増やしたい。